



ピッポ新聞

2009
3
No.241

年間購読料 (送料込み) 1500 円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886

静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX

054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail itoh@pippo.co.jp

「科学読みもの」を 再考するきっかけ

今泉吉晴氏の「ピアンキの名作『くちばし二つの謎をとく』」の連載も今月号で、はや9回になります。今泉氏の論文は現在の「科学読み物」や「子どもの本」への貴重な問題提起です。

一方、連載をお読みいただいている読者からも、様々なご意見や要望が寄せられてきました。その中には、子どもの科学絵本について考えていこうと、新たな会が発足する話もあり、それについては今回の連載の後で紹介させていただきます。読者の意見で共通しているのは、出版社がなぜ答えてくれないのかということでした。ロシアのナチュラリストであるピアンキの作品は、岩波少年文庫で紹介された後、1950〜1980年代には理論社を中心に数多く出ていきましたが、今はどれも絶版です。参考までにこれらの作品リストを掲げてみます。

- 『子ねずみのピーク』 岩波少年文庫 1954
- 『森の新聞(全4巻)』 理論社 1957
- 『ピアンキ動物記(全7巻)』 理論社 1968
- 『ピアンキのこども動物記(全7巻)』 理論社 1968〜1969
- 『ピアンキ動物記(全22巻)』 理論社 1981〜1982
- 『絵本「ピアンキ動物記」』 理論社 1984
- 『名作動物ランド(全12巻)』 理論社

- 『森の動物記』 角川文庫 1992〜1993
- 『ピアンキ森の動物新聞』 講談社 1989
- 『わんぱくすずめのチツク』 新読書社 1983

では、私たちが現在入手できるピアンキ作品にはどんなものがあるでしょうか？

福音館書店の3冊

- 『きつねとねずみ』 『くちばし どれが一番りっぱ?』 『どうくはなくても』

- 『ピアンキ動物ものがたり』 日本標準
- 『きつねとねずみ』 ネット武蔵野
- 『初めての狩』 未知谷

この6冊だけなのです。かつて出た本は古書店で購入するしかありません。

戦後60年以上を経て、外国の情報や本の入手が容易になり、在日外国人が増えている現代において、何という出版界の貧しさでしょうか。ピアンキの作品を知ろうとすると、読者にはこれだけの本しか与えられていないのです。そして、入手できるわずかなピアンキ作品の質はどのようのでしょうか？

今泉氏の本紙上連載を読んでいて強く感じたのですが、訳者がピアンキの豊かな作品世界を十分理解せずに、単に日本語に置き換えるだけであるならば、読者である子どもたちは不幸です。そればかりか原著者にも失礼だと思えます。こういう視点からも「科学読みもの」を再考する必要があると思います。

ピアンキの名作『くちばし』 二つの版の謎をとく

第九回

” ナチュラリストの

もの見方 ”

動物学者 今泉吉晴

私は前号で、『どつぐはなくても』(V・ピアンキ原作、田中友子・文 N・チャル―シナ絵、福音館書店、2007年4月)のツリスガラの項を読んで、物語の前半をふりかえり、田中友子氏が、原作の骨格を三つの要点で変えたうえ、一文一文の言葉のはしほしまで改変している事実を指摘しました。

改変は原作を壊すにひとしく、「原作」の表記は、原著者の名をかたって売る偽装ではないか、と思えてきました。

しかも、『どつぐはなくても』の原本とされるピアンキの『斧をもたない匠』は動物物語の名著です。

二十世紀を代表する大ナチュラリストが、一人の少年を主人公にして、鳥の巣に関心をもったことを契機に、鳥に心を開いてた

ずね、鳥の美しさと言葉に感動して、鳥と語らう機敏な心身を育んでいくさまを描きました。この作品は、自然に心をよせる子どもばかりかすべての人の自由な観察の精神をたたえ、励ますものです。そこで、今回はつぎのツバメの項を丁寧に読みます。

「ツバメ」は最短の項

ツバメの項は、私の試訳でわずか124字の、『斧をもたない匠』の項の中でもっとも短い項です。すでに見たカササギ、ヨタカ、ツリスガラの三つの項は、それぞれ186字前後でしたから、一段と短いのです(ちなみに、字数が最も多い項はキツツキで、435字です)。

ツバメの項

私の試訳

ぼくは人の家に向かって走りました。棟飾りの下でツバメが働いていました。巣をつくっているのです。

ツバメがとんで川岸におり、くちばしで粘土をとって、はこんできました。

これでは、オノはいりません。見せるまでもありません。

そこで、つぎのところへ走りました。

私は右の文章をすらすら読んで、そうか、そうかと、終わりまであまり考えもせず、読み終えてしまいました。少々あっけなく、物足りない感じさえしました。もちろん、私はツバメが何をしたかが、よく分かり、

「ぼく」が斧はいらない、と判断したことももつともで、文章が直接表現していることと自体はよく分かりました。

でも、もつとあるはず、という予感もあつたのです。なにしろ大ナチュラリストがいつていることです。何回くりかえして読んでもいいはず。

そこで、くり返し読んで何か感じないかと自分に問いました。そうしているうちに、自然に心に浮かんだのは、鳥にこれほどそつとよりそつと、自分の判断に必要な鳥のすることの全てを見届けるのは大変だ、という感想です。つまり、「ぼく」は、鳥にやさしくできるように自分を育てることができた、その精神をたたえる項ではないか、と思に至りました。

これまででは、カササギの巣をのぞいて、構造をみました。森にヨタカがすわっているのを見て、斧はいりませんか、といきなり話しかけました。ツリスガラがヤナギの綿毛を集めているのを見て、何にするのと、好奇心のおもむくままに話しかけました。

鳥たちはそれぞれに、やさしく答えてくれました。「ぼく」は多くをえて、でも、自分の気ままな、荒つぽさを反省もしたのです。鳥たちは答えてはくれませんが、それは不自然な接し方に思えました(ピアンキがこの作品の中で鳥に語らせている人間の言葉は、どんな観察場面を想定しているのか、いずれ検討したいと考えています)。

人間には、少しでも抵抗感があることはしたくない気持が働きます。そこでツバメの項では、ツバメがしていることを、距離

をとって見守り、何をしているのかを自分で見きわめ、自分がツバメから本当に教えてもらいたいことをすぐには問わずに、ツバメ自身が語り始めるのを待つことができました。「ぼく」の心に大きな転機が訪れたのです。

順をおって見てみましょう。ツリスガラのすみ場所を離れた「ぼく」は、人の家に向かつて走りました。家が見えているのかどうかは、原文にも書いてなく、ただ自分の家ではないのは明らかです。その家にか見たい鳥の巣があると分かっているのか、と想像できます。

人の家にたどりついた「ぼく」の目に入っていたのは、家の棟飾りの下で、何か作業をしているらしいツバメの姿でした。「ぼく」は何をしているのか、と見入ったでしょう。まもなく、ツバメは巣をつくっているのだ、と分かりました。そこが作品の「ツバメが巣をつくっているのです」という目撃の事実を書いた文章です。

私には、この文章が思い込みを正して読みを深くするための一つのヒントになりました。私はこの物語を読み進むうちにいつのまにか、「ぼく」は鳥の巣づくり行動を見たいのだろう、と思い込んでいました。この項を読んだときのことを、全体をすらすら読んだと書きましたが、「ツバメが巣をつくっているのです」という文章にかかって、そっけない印象を持ちました。なぜ、巣づくりの様子を書かないのだろう、とほんの少し違和感がありました。

それで、何回か読み返してこの部分でふと、「ぼく」にはツバメの巣づくりの行動をくわしく見ることに、あまり注意するつもりがない、と気付きました。

「ツバメが巣をつくっているのです」という一まとまりのことが分かれれば、それで満足なのであって、そうと分かれば「ぼく」には続いて、もっと別の何かを知りたい気持が生まれた、その知りたいことが次の行に書いてあることだ、と素直に読めるようになったのです。ただ、それだけのことを知るのに、私には時間が必要でした。

すなわち、巣づくりの細部ではない、もっと別の行動のつながりを知ることが「ぼく」の観察の方向です。というのは、ツリスガラの観察から、「ぼく」は、巣をつくる鳥は巣材をどこから手に入れてもってくる、と学んでいました。そして「ぼく」の目的は鳥に斧を使って楽に仕事をしてもらうことです。それには、ツバメが巣から飛び立ち、どこに着地して、何を巣材にとるかを考える必要があります。

そして、もし鳥が斧を使ったら、巣材をとるのがどう楽になるかをまず自分で確かめておく必要がある、とこれもツリスガラとの出会いで学びました。そうしてもし、楽になるだろうという見通しをもてて実際に斧を使ってもらえそうなら、その斧を使ったらいい場面で、どうぞ、使って、と何らかの方法で申し出るのです。

そこで「ぼく」は、ツバメがいつ、どこにでかけて巣材をとり、運んでくるかを見ようと、注意して観察を続けました。その

ために「ぼく」は、ツバメの巣から少し離れて、ツバメがいつ飛んでも、行き先を見届けることができるように、見通しのよい場所を選んだでしょう。もし、好奇心のおもむくままに観察するのだとしたら、巣に近づいて巣づくりをくわしく見たかもしれませんが、でも「ぼく」は別の注意力の向け方をしていました。

見たいものをみる： 真に自主的な観察

その時々心に生まれる好奇心にまどわされることなく、目的に集中していく。ツバメの項で「ぼく」は観察者に必須のこの自製の行動を身につけたことを証明しました。ビアンキの文章にもとってみましょう。

巣をつくっているのです。

ツバメがとんで川岸におり、くちばしで粘土をとって、はこんできました。

と、なっています。ツバメが巣をつくっている、と分かったあと、じつと見守りつづけた「ぼく」は、ツバメが巣から飛びたつ瞬間を見逃しませんでした。ツバメは川岸に着地し、そして粘土をとって、巣にもどるのを見ました。

事実の記述は問いを生む

この実際に見た事実の記述は読者に、さまざまな自然の関連を想像させます。例え

ば「粘土」ですが、川岸は家の前のどこかに立つ「ぼく」から少し離れたところにあつたでしょう。ツバメが川岸に着地して、くちばしでほじってとつたわずかな土が、なぜ、「粘土」と分かつたのでしょうか？このように事実の記述は、新しい問いを読者の心に生みます。



「森のだいくさん」(内田莉莎子訳、『絵本＝ピアンキ動物記』、理論社、1973年)のツバメの項(部分)。この訳文では「ぼく」は家へいちど「帰った」ことになっています。

私は、川岸にツバメが時間を置いて、くり返し着地しては土をとる場所があつたのではないかと想像しました。巣で働いていたツバメが飛んでいく先を目で追つた「ぼく」には、その場所をはつきり見届けることができた、と想像しました。何羽ものツバメがたむろするかのよう土をあさつていたかもしれない、と想像しました。おそらくそこは、川の流れが岸辺をえぐつていて、土が露出しており、離れたところか

らでも粘土の層である、と分かつた、いや、離れているからこそ粘土の層とはつきり分かつた、と想像しました。

そのように自然は粘土のありかを、ツバメにも人にも、誰の目にも分かるように配置しているはずで。そして、ふだんから子どもは粘土に心をひかれるものであり、「ぼく」も、そのありかや層の見え方(層の特徴)を知っていたのではないかと想像しました。

もちろん、粘土についてのこれらの想像があたっているかどうかは、分かりませんが、でも、ナチュラリストが自分の目でみた事実の確かな記述と思えば、想像力を働かせる楽しみが湧きます。

ピアンキの原文は、観察者(主人公の「ぼく」)の目に入った「単純な事実(誰の目にも明らかでない事実)」を最小限にしぼって書かれていて、日記の記述のようです。しかし、おそらくは日記そのままではなく、日記には当然あるいろいろな書き込みを取り除いて簡潔にしてあるのではないかと、と思えます。読者が事実の記述から、一つ一つの事実の記述をこえて、物事の大きな関連をはつきりとらえることができるように配慮してある、ということが大切です。私はすらすら読めすぎた、という印象を書きました、くり返し読み、結局は余分のことが書いてなかつたおかげで、このツバメの項で主人公の「ぼく」が初めて、好奇心のままに何でも見るのではなく、大きな関連を見るために必要な自制的行動をとれるようになった、と理解できました。

いったいどうして、「ぼく」は観察者に必須の自制的行動をとれるようになったのか、それはこれまでの検討で明らかなおお、どこから、何を、どうやって巣材に運んでくるか、といういつそう大きな関連を見ることが大切と知つたからです。

畑潤氏は「自由の精神とは、『感動』という経験をともなう、真に自主的な観察と批評・創造の精神のことである」と書いています(『人間性の開花』と表現・文化活動)(『月刊社会教育』2009年2月号)。

私は「ぼく」が身につけた自制的な大きな見通しをもつ観察の方法は、畑氏のいう真に自主的な観察にあたる、と考えます。なぜ、そういえるか、「ぼく」が飛び立つたツバメの行方をみまもり、何をつかんだか、考えてみましょう。

ツバメは川岸で、くちばしを使って粘土をとり、とつた粘土をくちばしで巣に運んできました。すでに巣づくりをしているツバメを見ていた「ぼく」は川岸の粘土が巣材であることを知らせるそれらのツバメの動きを、大いなる感動をもつて楽しんでみましょう。

同じ大地に生きるツバメが、自分の巣をつくるのに、川岸でとれる粘土を使う知恵をもつ、と知つたのです。本に書いてある文字を読んで知つたのではなく、ツバメが巣づくりしている場所にでかけて、その場所の空気を知り、ツバメがその気になつて自分で粘土をさがしだし、自分で運んで、そして巣をつくる姿を見せてくれました。「ぼく」は、すべてを自然の言葉をとおし

て、知りました。

分かったことは、とても単純です。「ツバメが巣をつくっている」、「巣材は粘土で川岸からツバメがくちばしでとりだした」、「そして「粘土の巣材はツバメがくちばしで巣に運んだ」です。単純というのは、誰の目にもはっきり見える、分かりやすい事実としていくらかでも見て、経験したことを整理できる、という意味です。

ところが、世界はこのような単純な事実でいっばいです。そこで、誰かが自主的な関心をむけて観察者になり、見ることに、その人にはもちろん意味があると同時に、それを伝えてもらえる社会にとっても意味があります。そして、観察者は、それぞれの事実の意味をこえる一つの判断をくだすことができます。物語にもどると、こう書かれています。

これでは、オノはいりません。見せるまでもありません。

そこで、つぎのところへ走りまわりました。

と、いうように、「一つ一つの事実をこえて、「オノはいりません」という判断をくだすことができました。そこで、「ぼく」は直ちに別の場所に向かったのです。

子どもの読者の力

以上で私の試訳によるビアンキの『斧をもたない匠』のツバメの項を読み終えました。この項の文章は、「ぼく」が一度も鳥

と直接の（人の言葉による）会話をしない、という設定であることで他のすべての項とは際立っています。「ぼく」はナチュラリストがふだんとっている観察の手法だけで鳥の巣づくりを見て、ツバメは斧を必要としていない、と判断しました。

ビアンキの明晰な文章の運びは、以上のような主人公の主體的な目標の設定と注意の集中、観察の対象の選択とみた事実の抽象、斧の機能との照らし合わせ、そして判断があった、と伝えていきます。と同時にこのことは、ビアンキ作品を読む子どもの読者が純粹に文章だけから、いかに楽しんで高度な抽象と判断を短時間のうちにおこなうものであるか、を示唆しています。

この項の文章は、主人公の観察者としての成長の転機を明らかにする重要なもので、字数が少ないのは、子どもの読者の純粹な思考をさまたげたくない、という配慮である、と同時に、成長の転機をきわだたせるためだったでしょう。あるいは単に、緊張感のある観察の実際の進行の描写は簡潔になる、ということを作家は示したかったのかもかもしれません。私はナチュラリストらしい簡潔な文章の深さに驚きました。

そこで私は、ビアンキの子どもの読者のためのこの作品で描かれた主人公の「ぼく」の観察の手法が、すぐれた生物学者の研究の手法とも一致するものであることを、すなわち、高度に体系化された現代科学の批評にも重要な役割を果すものであることを、この機会にお伝えしたいと思えます。

ナチュラリスト生物学者の目

アメリカの植物学者、エドガー・アンダーソンは、「ゴルフや映画にいくなら、畑で畝に土よせしていたい」という、芯から植物に愛着をもつナチュラリストでした。

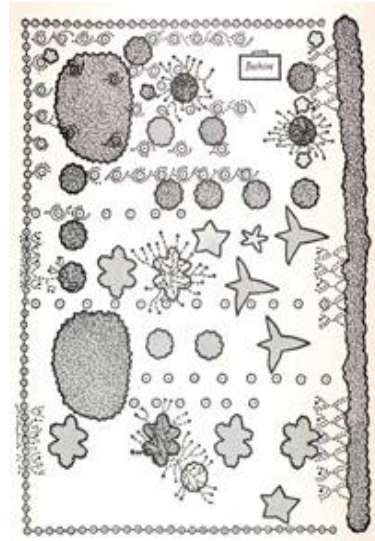
アンダーソンによると、熱帯の先住民族がつくる畑や果樹園（庭）は、きちんと作られたヨーロッパや北アメリカの畑とひどく違い、たいいていの欧米人（特に植物の採集家や農学者）には畑に見えませんが。

しかし、アンダーソンは所用でグアテマラを訪れたとき、「先住民族の畑を見れば分かる単純な事実が、研究してみる価値がある」と思いました。さっそく数日の暇をつくると、畑を見て歩き、小さな畑を一つ選んで一枚の図面をものにしました。私が注目するのは、アンダーソンが先住民族の畑をちらりと見て「単純な事実」（simple facts）に好奇心を刺激され、そこに価値を見ていることです。

アンダーソンという「単純な事実」とは、先住民族の畑には、なぜ、いろいろな作物や果樹がいつしよに茂っているのか、とか、見慣れないあの植物はなにか、とか、枯れたトウモロコシがそのままになっているがなぜか、とか、あるいは畑に穴があいているのはなぜか、といった疑問です。つまり、『斧をもたない匠』の主人公「ぼく」が、なぜならにさそわれて自然に向けた関心と変わりがありません。

そしてまた、アンダーソンが「研究してみる価値がある」というのは、暇をつくっ

て畑を見て歩き、一枚の図面をものにする、ということ、**「ぼく」**が人の家のまえて巢材をとりに行くツバメを観察したときの考え方と変わりません。**「ぼく」**も、誰でも見ることが出来る**「単純な事実」**に価値を見て、実際に注意を集中して見ました。



アンダーソンによるグアテマラの先住民族の「果樹園・畑 (orchard-garden)」の図。点線で描かれているのは瓜類など蔓でのびる作物です。左端の の連なる仕切りはトウモロコシ。マメの蔓がかかっています。

見えない畑を見る

アンダーソンはものにした一枚の図面について、こう書いています。「私が図面にした畑(庭)は、アメリカ合衆国でいえば街の小さな一画ほどの狭いものでした。手のつけようもないほど元気に育った作物と果樹でいっぱい、生真面目な欧米人には、何の計画もなしにつくられた畑、あるいは見捨てられた畑(仮に畑と分かったとしても)、に見えるでしょう。ところが、

畑を見ていくうちに、育っている植物がどれもこれも人の役に立つもの、と分かってきました。無用の草は一本もありません。」

専門家の誤り

アンダーソンはこうして先住民族の畑を親しく見るようになり、アメリカ先住民族が独自に育んできた、栽培植物の品種の微妙な違いをよく見分けていて、注意深く世話して品種を守っていることを明らかにしました。また、栽培植物の起源を石器時代の定住漁民のごみため(貝塚)と結びつけたユニークな研究で知られます(Plants, Man and Life, Little, Brown and Company, Boston, 1952)。

残念ながら、それらの研究をここで紹介する余裕はありませんが、それらの研究をもとにしたアンダーソンの学問批判のいくつかは、観察者の視点としてみておくことが必要です。アンダーソンは欧米の植物学の弱点を指摘して、こう書きました。

「マレーシアを訪れた欧米の植物採集家が、伝統的な果樹園をたびたび自然の森と誤認してきました」。欧米の植物学者がミカンの祖先型(野生種)と見た一種は、実際には、土地の人の庭から採集したもの(栽培植物)でした。「欧米の植物学者が過去のさまざまな時代に熱帯で採集して、栽培植物の野生の原種と同定した植物が、じつは栽培植物でした。」

これらの誤りは、熱帯の畑や果樹園を自然の草地や森と見誤ったことに起因していません。そのもとは、欧米の植物学者の「単

純な事実」への無関心と思われます。

そこでアンダーソンは、これら植物学者の関心のありようについて、こう述べています。「近代科学としての農学は温帯で発達しました。つまり農業についての私たちの科学的な理解は、北ヨーロッパと北アメリカの比較的単純な農業についてのもので、それも数世紀の経験から導かれたものにはすぎません。そこで、熱帯にでかけた植物学者は学んだことを忘れた方が、はるかに多くを得ることができると、多くの植物学者は分かっています。」

アンダーソンは「単純な事実」に関心をよせ、長く見続けてきたナチュラリストとして、より広い世界を知った確信から、学問批判をしており、私はそこに注目します。「単純な事実」に関心をよせることは、広い世界に身をおくことを意味しており、そこが子どもの世界に通じています。

『とつづくはなくても』のツバメの項

田中氏が改変した「文」作品のツバメの項はどのような展開か、見てみましょう。

この項は原作にくらべてずっと長くなっています、字数ではビアンキの原作が私の試訳で124字に対して、田中氏の「文」では216字です。ただ、かなりの書き加えがあっても、原文をわかりやすくする、補足的な書き加えのため、とつづくは考えまです。けれど、ほとんど原文が残っていないも同じ大きな改変がなされています。

原作と比べやすいように、前にかかげた私の試訳をここでもう一度、前半と後半の二つに分かれた田中氏の「文」にあわせて二分し、「文」の前半と後半のそれぞれの後に字を小さくして示します。試訳の文章には番号をふってあります。

ツバメの項 田中氏の「文」

前半（『どうぐはなくても』のp16～17）
かわのそばに ツバメが います。くちばしで ねばりけのある だるを ほり おこしては ひとの いえの のきしたへ はこんでいます。
ツバメさん！ なにか どうぐを つかいませんか？「いやいや こうやって くちばしで すくって はごぶからど うぐなんか いらんないよ」

原作の前半

- 1 ぼくは人の家に向かって走りまわりました。棟飾りの下でツバメが働いていました。
- 2 巣をつくっているのです。
- 3 ツバメがとんで川岸におり、くちばしで粘土をとって、はこんできました。

後半（『どうぐはなくても』のp18～19）
ツバメの いえは だると わらをつばで まぜあわせてつくりまわす。
くちばしを きよくに うごかして はこんできた だるをぬりつけてゆきまわす。これでは どうぐは いらんせんね。

原作の後半

- 1 これでは、オノはいりません。見せるまでもありません。
- 2 そこで、つぎのところへ走りまわりました。

混乱を生む大改変

一読して大きな改変がなされていることが明らかなので、手順としてこの項の全体の見取り図を先に頭に入れる必要があります。田中氏はツバメの項の文章を、（『どうぐはなくても』の）二見開きの二枚の絵の文字スペースに分けて配分する必要から、前半と後半の二つに分けた上で、文章を書き加えた、と思えます。しかし、以下の検討で明らかになる通り、内容的には原作とは前半、後半の内容が逆になって、前半でツバメの巣材あつめ、後半で巣づくりの記述になっています。

前半（最初の見開き）では原作の「前半の3」の文章を核にして、前言「かわのそばに ツバメが います」をくわえ、後に「ツバメさん！ なにか どうぐを つかいませんか？」以下の文章を加えました。原作の「前半の2」の文章は、後半にもつていき、原作の「前半の1」の文章は削除しました。つまり、前半で生かされたのは「前半の3」の文章だけで、前言「かわのそばに ツバメが います」を加えたため話の順が巣材集めから始まることになりました。これでは原作の文章は、ほとんど残らないばかりか、文章と文章の関係が消えます。



『どうぐはなくても』のツバメの項（部分）。

後半（後の見開き）は、原作の「前半の2」の文章を移した形ですが、内容的には巣づくり作業の細部を書き込んだ田中氏の創作文に差し替えてあります。そのあとに、原作の「後半の1」の文章をつづけています。「後半の1」の文章は、原作の中では「ぼく」の判断を意味しましたが、もちろん、ここではその意味を失っています。そして、原作の「後半の2」は削除しました。後半もほとんど純粋に田中氏の文章です。

巣材あつめを先にしたわけ

原作との構成の違いを見ました。改めて文頭から内容を見ていきましょう。最初の文章が「川のそばにツバメがいます」です。原作では最初の文章が「ぼくは人の家に向かつて走りまわりました」で、たとえ家の前にいる、という言葉がなくても、「ぼく」が家の外壁についたツバメの巣を見ていると分かれば、観察者の立ち位置が分かる仕掛けです。

しかし、田中氏の「文」では、観察者がどこからツバメを見ているのか、落ち着きません。というのは、前のツリスガラの項の始まりが「小川のそばにツリスガラがいます」となっていて、小川の近くに今もいるのか、別の川にいったのかが、分かりません。

観察者の立ち位置がはっきりしないと、例えば、文章に描かれたツバメの動きをイメージするのに困ります。「(ツバメが)くちばしで粘り気のある泥を掘り起こしては、人の家の軒下へ運んでいきます」とありますが、観察者から遠ざかるのか、近づくのか判断できなくなりそうです。絵に描かれている家へ向かうのだとしたら、遠ざかると解釈できそうですが、すると、離れているツバメが掘り起こしている「粘り気のある泥」とは、見て分かるのか、それとも「粘土」を分かりやすくいいなおした言葉なのか、疑問がとけます。

さて、読者はこの項の見開きをひらいて、巣材あつめの文章をまず読みます。しかし、読者は、ツバメが泥で巣をつくることをまだ知らないのですから、ツバメが泥をつまみとって人家に運んでいる、と分かっても、何のためかは分かりません。そして、読者が分からないまま、ピアンキらしき作中人物が「ツバメさん！何か 道具を使いませんか？」と聞きます。

問うた人物は、巣材と知って聞いているのに、読者はそうではない、というずれのある場面になりました。読者は、ピアンキらしき作中人物の問いについていけないの

ではないでしょうか。

この段は、原作では主人公「ぼく」がツバメの巣材あつめを見て、「斧はいりません」と判断をくだす場面に相当します。「ぼく」はツリスガラの巣材あつめを見た経験に学び、ツバメに聞くまでもないといつて、的確な判断をしました。つまりピアンキは、「ぼく」がいくつかの鳥の巣づくりを見て成長したことを、文章相互の関連から読者に伝わるように描きました。しかし、田中氏の改作は成長をばぶいてしまい(ピアンキらしき人物がここで成長しては少し変ですが)、文章量は多いのです。

二回の否定が明かす「文」の愚かさ

前半の末尾で「道具なんかいらんよ」、後半の末尾で「これでは道具はいりませぬ」と、二回否定します。種の習性のこと、一回でいいのに二回の否定は変です。しかし、二回の否定は斧を道具にした愚行の必然のなりゆきです。斧ならいるかいらないか、一回問えばいい。しかし、いろいろ種類がある道具では、仕事が違えばそのつど要不要を問わねばならず、もともと物語が成り立ちませぬ。

否定の仕方がまた変です。前半では、「何か道具を使いませんか？」と、巣材の泥をくちばしですくって運ぶツバメに問うたのに対して、ツバメは「くちばしですくって運ぶから道具なんかいらんよ」と答えています。

しかし、斧を使いませんか、という原作

の問いであれば、その答えでもよくても、いろいろある道具についての会話では、そうはいきません。すくって運ぶための道具もあって、くちばしとどちらが楽かをツバメは答えるのが改作での答え方と、物語の最初で田中氏ご自身が設定しています。鳥が、どんな道具が用意されているかを、問い返さずに答えているのも疑問です。

一方、後半の道具がいるか、いらんかの判断の場面では、奇妙にもツバメに聞かずに「これでは道具はいりませぬ」と、ピアンキらしき人物が判断をくだしています。ここは巣づくりの場面で、ツバメが泥を巣にぬりつける左官の仕事にあたる作業をしています。左官の道具を使つた方が楽かどうかは、ツバメに聞かなければ分かりませぬ。

右に指摘した通り物語の始めの方で、ピアンキらしき人物がこうしています。「道具があればずっと楽なのではないかしら？いろいろな鳥たちに聞いてみましよう」(『どろぐはなくて』、p6)。聞かずに判断できないから、ピアンキらしき人物はたくさん道具を背負い込み、ツバメの巣の前までやってきました。そして、いざツバメに聞くという段になって、「これでは道具はいりませぬ」と、自分で結論をだしてしまします。

ここでも、田中氏が物語のあちこちに手を入れていたために、事態が複雑になっています。「これでは道具はいりませぬ」といったのは、ツバメが家の外壁についた巣に、「くちばしを器用に動かして」泥を

なすりつけていたからで、要は自分の体の道具で巣をつくるのを見たからです。しかし、田中氏は、この物語の最初の場面で、鳥が自分の体の道具で巣をつくれる、と書いて、すでに書いています。また、鳥が人間の道具を使わず、自分の体で巣をつくっていることは、誰もが知っている常識です。そこをあえて道具を使ってもらおうというのが田中氏の設定です。

田中氏はピアンキの原作を物語の冒頭で、大きく変えました。「斧」を「道具」に置き換え、「なぞなぞ」の中身をかえて「質問」にし、主人公「ぼく」を削除して「ピアンキらしき人物」を説明役に立てました。続発した矛盾はどれも、三つの要点の変更と関係し、あるいは、直接そこに起因するものです。すべては関係しあっているものであって、いちいちの改変が新たな改変の必要を引き起こして、手がつけれず、矛盾だらけになりました。

福音館書店は陳謝すべし

改変による矛盾の問題を指摘したので改めて、田中氏と福音館書店が問題を放置していることを指摘しておきます。田中氏は物語の冒頭で、「手も斧も使わないで、たてる小さなお家つて、なあと」という原作のなぞなぞを削除し、質問で代えました。「家をたてる時には、道具を使います。でも、道具を使わないでたてられた家もあるんです。どんな家でしょう?」(『どうくはなくても』、扉ページ下)です。この質

問に、田中氏はなぞなぞにあった「手を使わない」を入れませんでした。そのため「答えは鳥の巣です」と続けたものの、鳥とはかぎらず動物の巣ならどれでも正解、という最初から論理がとおらない物語にしました。

この問題については、すでにピッポ新聞一月号(p5)で指摘しましたが、もしこれが入試問題なら学校当局が正解例の誤りといつて訂正して公表し、陳謝するはずです。福音館書店はごつされるのでしょうか。

今泉氏の批評を読んで

子どもの科学絵本はどのようにして生まれ、読者に届くのか。私たちが知り得るのは、絵本からの情報だけです。しかし、幾つかを比べたり、原書と照らし合わせたりすると、何と多くの疑問が見えてくることでしょう。

今回のピアンキの絵本についての問題提起は、私たち読者にさまざまなお話を教えてくださいました。

出版社が読者の疑問や指摘に真摯に対応していないこと。また間違いを認めても既に購入した読者は、そのことを知る術がありません。そして、未訂正の絵本は今も流通し続けたままであること。

大きな問題は、子ども達は何も知らず、知識的に誤った科学絵本を信じていること。などです。

誰も、何も書かないままだったら、どうなったのか。誤りを認め訂正することは、出版社の義務です。それをやってこそ出版社の信頼につながるものだと思います。出版社がこれほど読者を「無視・軽視」していることに驚きを禁じ得ません。

ピアンキはロシアのシートンと呼ばれ、シートン作品の紹介者でもありました。動物文学の創始者ともいえるシートンについても、その真の姿は日本ではまだ多くの人に知られていない実情があります。自然を知らせることの難しさ。訳者が自然に関心がなくてほんとうに訳せるのか、というそもそもの疑問も生まれます。

今回のピアンキ絵本への問題提起を、個人対個人のやりとりで終始させないために、読者として共に考えていきたいと思えます。子どもたちは、外国 国内を問わず、ナチュラリストの作品を、誠実な訳と内容で受けとる権利があります。そこで、自然を扱う書籍の諸問題を考えることになりました。現在、読者有志が「E・T・シートン研究会」の発足準備を進めています。

以下がその趣意書です

E・T・シートン研究会 趣意書

E・T・シートンは「動物文学の父」といわれ、多くの「動物物語」の作家として世界に知られています。「人も動物も同じ」という主張を生涯貫き、土地の自然環境を上手に使って暮らす野生動物は、その土地の先住権を持つという考えでした。

シートンの真の姿は「作家」にとどまらず、動物学者、画家、開拓者、講演家、社会活動家、野外教育の創始者、先住民に学ぶ大学の経営者、また自身の印刷所をもつ出版人でもありました。日本では、これら広範なシートンの活躍の諸相の多くが知られていません。

北アメリカ大陸をまたにかけて旅した野外研究の人、シートン。大地に近く暮らす人間でありたいと望み、カナダとイギリスの美術学校で学んだ画家でありながらフロンティアに入った開拓者でした。オオカミ、ヘラジカの鳴き声から鳥の聞きなしを交えた講演で人気を博し、「森で生きる技と知恵」を子どもに伝える野外教育を組織し、「ブラック・ウルフ」というインディアン名を名乗って先住民族の権利回復のために闘った社会運動家でもありました。シートンは先住民族と協力して手話のサインを絵に起こし、「サイン・ランゲージ」の辞書を編纂しました。晩年にはニューメキシコ州サンタフェに「インディアン知恵の大学」を設立し、シートン・ヴィレッジ印刷所からは、南西部の文化を伝える多数の美しい装丁の本を出版しました。

もともとシートンの作品には『動物記』と名づけたシリーズはありませんが、日本では子どもの本として『動物記』の名で、各物語の内容をやさしく、時に陳腐に、つまり翻案(原作を基に改作すること)で多

数の出版社から刊行されています。

シートンの「動物物語」は本来、動物の言葉を人間の言葉に翻訳する、「動物文学」の誕生を告げる新たな表現方法を伝えたものでした。

優れて的確な自然描写、動物のなわばりと行動圏、臭いづけや身振りによる仲間どうしのコミュニケーション、それらを通じた知恵の伝播など、今日の動物生態学や動物行動学の基礎をつくった諸概念の発見の記述が豊富に書き込まれています。自然の見方、人と自然のあるべき関係について書かれていくにもかかわらず、日本では、自然文学や動物学にとつての先駆的な貢献を評価する批評がなされた形跡は、ごく限られた人々の高い評価を除いてほとんどありません。そして、もともと豊かにシートンの恩恵を受けているはずの動物学の専門家さえ、「シートンは動物学の素人」というような状況が見られます。

いったいなぜなのか、この会ではその理由をも考察し、新たなシートン像の確立をめざします。

シートン作品の多くは19世紀末の1890年代から20世紀初頭の1900年代始めに刊行されました。その頃(1899年)、日本政府はアメリカ合衆国に学んで「北海道旧土人保護法」なる法律を制定し、アイヌ民族の土地を奪う植民地構想の仕上げに取りかかっています。

私たちの先人がシートン作品の魅力に気づくのは、遅れて1930年代のことです。しかし、一方に「北海道旧土人保護法」をもち、一方に『動物記』を読むことは矛盾です。アイヌ民族に対する私たち自身の姿勢を問うことなしの『動物記』の本格的な評価や翻訳は難しかったでしょう。『動物記』は紹介されたものの、それはシートンの先住民族に土地を返せという思想を欠落させたままでした。

シートンの動物物語は、ラルフ・エマソン、ヘンリー・ソローをはじめ、世界のさまざまな思想の継承の上に成り立っているはずです。シートンの動物物語と生き方は日本に紹介されるよりずっと早く世界に衝撃をもって迎えられ、多くの人々に影響しました。

イギリスではグレイ・アウルやリチャード・アダムズが、ドイツではコンラート・ローレンツやハイニ・ヘデイガーが、ロシアではヴィタリー・ビアンキが、シートンの動物学や文学(動物物語)に触発されて、文学的、或いは、科学的貢献をなしとげる自身の仕事を始めました。

また、旧チエコスロバキアで継承されたシートンの野外教育活動(「ウッドクラフト・インディアンズ」と名乗る子どももの自然活動グループを組織しました)は、旧ソ連の影響下にあつては地下活動を強いられ

たものの、現在は世界でもっとも活発なウッドクラフト運動となっています。また、中国、韓国などシートン作品が人気の国は多くあっても、私たちはその状況をほとんど知らずにいます。

そこで、私たちは先住民族の世界観を含む諸思想の潮流と関連の上にシートンの自然文学と動物学を再認識する一方で、シートンの業績がどのようなジャンルや科学的系譜に受け継がれているかを具体的にみていくことで、シートンが成し遂げた仕事の領域をよりよく評価する環境をつくりだしていきたいと考えます。

「E・T・シートン研究会」
発足準備会事務局 宮代一義

福音館の復刊絵本20選

3月中旬復刊です。

- 『三コ』 斎藤隆介・作 滝平二郎・絵 1365円
- 『絵本きりなしはなし』 梶山俊夫・作 1470円
- 『いしになったかりゅうど』 大塚勇三・再話 赤羽末吉・絵 1470円
- 『くさはらのこびと』 クライドルフ・作 大塚勇三・訳 1260円
- 『ふゆのはなし』 クライドルフ・作 大塚勇三・訳 1365円

塚勇三・訳 1365円

『カーニバルのおくりもの』 シャーリツ
ブ&サプリー・作 内田莉莎子・訳 1260円

『だれかがよんだ』 せがわやすお・作 1575円

『かめさんのさんぼ』 中谷千代子・作 1470円

『もりのまつり』 中谷千代子・作 1470円

『ほしのサーカス』 小沢良吉 1365円

『おばけのジョージ』 ブライトン・作 1155円

光吉夏弥・訳 『リーベとおばあちゃん』 テンフィヨール・作 ノールベルグ・絵 山内清子・訳 1365円

『トーマスのもくば』 小風さち・作 長新太・絵 1365円

『まのいりようし』 瀬田貞二・再話 赤羽末吉・絵 1155円

『どろにんぎょう』 北欧民話 内田莉莎子・文 井上洋介・絵 1260円

『おやゆびトム』 ペロー童話 ポストマ・絵 矢川澄子・訳 1260円

『わからんちんのココ』 はたたかし・文 長新太・絵 1470円

『あかりの花』 中国苗族民話 肖甘牛・採話 君島久子・再話 赤羽末吉・絵 1365円

『金のりんご』 ブルノフスキー・作 内田莉莎子・訳 1365円

『太陽と月になった兄弟』 ポリビア民話 秋野鞠子・再話と絵 1470円

古書の話二題

その1 ピクシー (Pixie) 絵本



ピクシー絵本というのをご存知だろうか？これをご存知の方は、おそらくは相当マニアックな絵本収集家だろう。これは1974年頃小学館から出されたもので、手の平サイズ(10×10センチ)の可愛い絵本なのだ。表紙はペーパーバックで、綴じもホッチキスで中留めされているだけで、いたって簡単な作りである。

でもね、これはデンマーク生まれの、れっきとした翻訳絵本なのだ。当時の定価六十円で、全部で六十四冊制作されたそうので、その内の十六冊を入手した。

店に、段ボール箱2ケースの本を売りに来た、お客さんから買った本の中にこれがあつたのだ。入手できたのは偶然で、ぼく

だって、ピクシー絵本などというものを知っていたわけではない。買った本を整理していて、たまたまこの小さな絵本が、目にとまったのである。調べてみたら、古本的に結構おもしろい存在だと分かってきた。

などと書いていくと、いかにも古本屋のオヤジ風なのであるが、全然別の視点からぼくの目に留まったのだ。

表紙の画像を載せた『ひよことおかあさん』を例にとると、扉にはブルース・グラント・作 メリー・フィルディン・絵 原まち子・訳とあり、ここまでなら普通の翻訳絵本と変わらないのであるが、さらに続けて、那須田稔・文とあるのだ。訳者がいて、文(?)を書いた人がいるとは、どういうことなのだろうか?この一冊だけではなく、入手した十六冊すべてが、「訳者」と「文」は、違う人の名が書かれている。

デนมマーク語の原書を最初に日本語に置き換えたのは訳者だろう。ではその訳者の日本語の文章では、通用しなかったのか? 「文」那須田稔が登場したのだろうか?

那須田稔といえば、当時一流の児童文学作家であった。出版社の小学館はこの那須田稔の名前を使うことで読者にアピールしたいのだろうか。疑問は尽きない。

今、本紙で今泉氏が論じている、『どうくはなくても』のビアンキ・原作 田中友子・文にも通じる問題を含んでいるようにも思えるのである。

ちなみにぼくはこの絵本に一冊二千円という値段を付けて、ピッポのネットショップで売っている。既に六冊売れて、在庫は十冊だ。興味ある方はぜひご覧を。

その2 宅買い

「宅買い」とは、古本屋の業界用語かな? 意味は読んで字のごとく、個人のお宅へ出かけていって、蔵書などを購入すること。

このところピッポ古書クラブにも、チラホラ、声をかけてくれるお客さんも出てきた。子どもの本専門でスタートしたピッポ古書クラブであったが、それだけだと、なかなか本が出てこない。それでは商売にならないので、普通の古本屋と同じに、すべてのジャンルの本を扱うようにしたのである。これが結構おもしろいのだ。

先日も、家を建て替えるのでと電話をいただいて、あるお宅に伺った。処分したいという本は二十年ぐらい前の大型の美術全集などで、4種類あり、全巻揃って美本ばかり。さて困ったぞ!ご主人の遺したこの立派な本、買った当時の値段は全部で六十万円ちかい。奥さんは高値を期待しているのが分かるのである。

でもこの手の本は、今は驚くほど安い。その最大の理由は需要がないことで、購入者がいなければ、古書市場でも値段は付かないのだ。ふとみると、別の所に「刀剣」

関係の本が揃っている。ご主人の趣味で、刀剣の鑑定家でもあったという。こちらも打ってくれないかと聞いたら、こちらはご主人の仲間が引き取りに来るのだそうだ。近寄ってよく見ると、これらの本ならば、少し高値でも引き取りたい本がずらり。「宅買い」もままならないのである。本の処分をお考えの方、声をかけてください!

編集後記

明後日(15日)の日曜日は駿府マラソンです。そうなんです!今年も親しい幼稚園の先生たちと10キロの部に出ます。

このピッポ新聞が、みなさまのお手元に届く頃には結果は判明しています。いえ、順位やタイムなどという大それたことではなく、完走できたかどうかという結果のことです。去年が1時間7分、さて今年は何のんびり走ろうと。借りている畑ではホトケノザやオオイヌノフグリなどの雑草が、我が世の春を謳歌しています。その場所にはジャガイモを植える予定なのですが、もう少しだけ雑草たちに貸しておきましょう。有度山では、今、キブシの緑がかった白い花が目につきます。そろそろかな?タケノコの目覚めの時はさ。先週は十本ほど掘れたのに、昨日は空振りだった。まだまだタケノコもぎまくれなようです、今度暖かい雨が降ったなら、一斉に目覚めるのかな?この時期は、引越の季節でもあるようです。今月引越すのですよ。いえ、ぼくではなく古書たちがね。二十坪ほどの倉庫を借りたので、そこに古書をすべて移動させるのです。やる前からため息が出ます。春は生き物たちが動き出す!